

○富満龍徳・渡邊英城¹⁾・後藤愛・安波朗子
(大分農林水産研指花き・¹⁾大分県研究普及課)

【目的】

大分県の鉢物生産では、消費低迷と単価安が続く中、経営の柱となる新たな品目の開発が切望されていた。

そこで、今までの育種で保有していた遺伝資源を活用し、鉢物に適したわい性トルコギキョウの育成を行った。さらに、現地普及に向けてその栽培特性を明らかにした。

【育成経過】

2004年に保有するトルコギキョウのわい性系統を交配した種子をもとに、2005、2006、2007、2008年に選抜を行い、小輪多花性のわい性系統を育成した。この中で今までの鉢物トルコギキョウにない優れた形質を有する系統を品種名‘チェリービー’として2009年に品種登録の申請を行い、2011年5月24日に登録が認められた。

【品種特性】

花は鮮赤紫色で小輪多花の一重咲き。わい化剤を使用しなくても草丈が低く、株元から旺盛に分枝するためコンパクトな草姿を有する。

市販品種と比較して、分枝性に富み小輪多花、わい化剤を使用しなくても草丈が低く草姿のバランスが良い等の特徴がある（データ省略）。

【材料および方法】

育成した‘チェリービー’の栽培特性を明らかにするために、2011年6月22日に4号鉢を用いて288穴セル苗を鉢当たり1株定植し、用土及び施肥の試験を行った。用土には県産杉皮をペレット加工した粒状バーク、赤玉土と粒状バーク(3:7)の混合土、市販混合土のBM2を供試した。施肥には被覆肥料(13-11-13)140日タイプを供試し、鉢当たりの施肥量を3、4、5、6gとした。

【結果および考察】

用土の種類検討では、赤玉土と粒状バーク混合土は開花が最も早いものの、株径が小さく、立ち枯れ発生率が35%と多くなった。混合用土BM2は株径や有効花蕾数は優れたものの、全体に葉先枯れの発生が見られた。これらの結果から、今回供試した用土では粒状バークが最も適すと考えられた(表1)。

施肥の検討では、調査終了時の用土のECは施肥量が増えても差は見られなかった。株幅は施肥量の増加にともない増加した。これらの結果から、‘チェリービー’は施肥が品質に与える影響が大きく、鉢サイズとのバランスから考えると4号鉢では鉢当たり4gが適当と考えられた(表2)。

表1 用土と鉢物形質

用土	施肥量 (g/株)	開花日数 (日)	草丈 (cm)	株径 (cm)	有効花蕾数 (個)	pH	EC (dS/m)	立枯発生率 (%)
赤玉土+粒状バーク	4	103.6	16.4	17.3	12.5	6.07	0.40	35
BM2	4	126.5	17.8	21.2	12.9	7.03	0.46	0
粒状バーク	4	122.3	17.5	19.7	11.2	6.79	0.39	0

注) pH、ECのは調査終了時の用土搾汁液の数値。

表2 施肥量と鉢物形質

用土	施肥量 (g/株)	開花日数 (日)	草丈 (cm)	株径 (cm)	有効花蕾数 (個)	pH	EC (dS/m)	立枯発生率 (%)
粒状バーク	3	114.4	17.1	17.7	10.1	6.73	0.57	3
〃	4	122.3	17.5	19.7	11.2	6.79	0.39	0
〃	5	128.7	17.7	21.9	12.0	7.50	0.33	0
〃	6	127.9	18.2	22.6	13.0	8.23	0.31	5

注) pH、ECのは調査終了時の用土搾汁液の数値。